

No. 1145

昭和50年日本

あんた これから どうすんの

政治の体質改善をせまられ、クリーン三木を売り物に登場、政権を担当して2年日、支持率も20%台に落ちて受難の年であった三木首相。国民も又受難の年であった

青木湖にスキーバスが転落し、24人が死亡するという悲しい事故で幕を開けた昭和50年。遺族の悲しみのおえつは昭和50年日本に暗い予感となって響いていった。

いつ終わるとも知れぬ不況は深酷さを増し完全失業者は100万人を超え、国民は失業の危機にさらされた。

上野の森には、一杯のどんぶり飯とミソ汁を求めて失業者があふれた。それは高度経済成長時代が終わる中ではじきだされた人々の姿であり、日本の行く末に暗示さえ与える姿であった。高度経済成長時代を担った佐藤元首相の死去は、その時代が完全に終わった事を告げていた。しかしその時代がばら卷いたひずみの代償はまともに国民がかぶらなければならなかった。

コンビナートの安全性が問われたものの遅く、石油タンクはグレンの炎を上げて燃えさかり、流出した油は海を殺した。

ひしゃくで油をすくい、テトラポットをびっしりおおった油を手でぬぐい、人々はいなき作業を延々と続けなければならずその中で死者も出た。とつてもとつてもとりきれぬ汚染。高度経済成長時代の企業優先の姿勢がばらまいたひずみは、いつまでも我々の生活をおびやかす事を教えた。新たな公害としてさわがれた六価クロム禍も例外ではなかった。

16年も前に六価クロムが、人体に有毒だとわかっているながら、行政も企業も放置してきた結果を労働者や、住民が命で償う。

くり返してはならない事がくり返されてきた。もうこのこともひとつの時代の終りと共に終って欲しいと誰もが願う。

昭和50年日本はひとつの時代の終わりであり区切りであった。低成長安定経済への質的転換をせまられる日本に幻にしろ、海洋時代の幕明けを高らかにうたった海洋博覧会。

戦後30年にして実現した天皇訪米。そこでは平和構築への新たな決意を国民はみた。ジャイアンツは過去の栄光である事を示し、新たなヒーローを生んでいくプロ野球。

戦後間もなくGHQ指令でたなあげにされた公務員や公共企業体労働者にスト権復活をめぐる激しく揺れ動いた8日間。

政治の場、国会も又与野党勢力接近の中で激しく揺れた。

ひとつの時代が終わり新たな時代への胎動をみせる昭和50年日本。

どこへ行くのか日本。どうなるのか日本。新たな時代はどんな時代か。そこでは国民の犠牲の悲鳴は聞きたくない。